

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

区 名 浪速区

学 校 名 大阪市立栄小学校

学校長名 岸本 昌悟

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和7年4月17日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育局では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育局の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・大阪市立栄小学校では、第6学年 32名

令和7年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語では、学習指導要領の内容の6つの観点すべてで、全国平均を下回った。特に、「(2)情報の扱い方に関する事項」「A 話すこと・聞くこと」でその差が大きい。算数では、学習指導要領のA～Dの5領域すべてで全国平均を下回った。「B 図形」は全国平均との差はほとんどないが、「C 変化と関係」はその差が大きく、課題がある。理科は「『エネルギー』を必要とする領域」「『生命』を必要とする領域」において全国平均との差が大きかった。3教科とも平均無回答率の割合が全国平均に比べて高くなっている。

児童質問紙においては、「学校に行くのが楽しい」と答えた児童の割合が、全国平均よりも大幅に高かった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕言葉と図で説明した理由を選択する設問や、問題文に登場する人物が気付いたこととして適切なものを選択する設問では、正答率が高かった。文章全体の構成や、言葉の違いに気づくことができる児童が多いためと考えられる。一方で、話合いの様子に当てはまる内容を選択する設問や、条件を満たして文章を書く設問では、正答率が低かった。このことから、必要な情報を整理し、説明したり結びつけたりすることが苦手な児童が多いといえる。

〔算数〕知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述する設問や、「10%増量」の意味を解釈し、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを考える設問で正答率が低かった。思考・判断・表現の力を育成していく必要がある。

〔理科〕アルミニウム、鉄、銅について電気を通すか、磁石に引き付けられるかを選ぶ設問では、ほとんどの児童の回答が誤答となった。身の回りの生活と、学習した知識を結び付けていく活動が大切である。

質問調査より

「将来の夢や目標をもっていますか」の質問に肯定的に答えた児童の割合は73.3%で、全国平均に比べて低い結果となった。トップアスリートによる出前授業や文化芸術体験を取り入れるなど、キャリア教育をより一層充実させる必要がある。一方で、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」では、肯定的な回答が90%で全国平均に近く、「人が困っているときは、進んで助けていますか」では、肯定的な回答が96.7%と全国平均を上回った。本校の推進する人権教育の取組の成果であると考ええる。また、地域との連携を図った教科・領域の学習について、「まちたんけん」「車いす体験」等、横断的に取り組みカリキュラム・マネジメントも進めている。今後も継続的に取り組み、自己肯定感の向上に努めていく。

今後の取組(アクションプラン)

◆国語で漢字を正しく使ったり、算数で異分母分数の加法の計算をしたりするなど、基礎的・基本的な知識に関する問題については正答率が高くなっている。引き続き各学年の実態に応じて習熟度別少人数指導や教科担任制など学習形態を工夫し、系統立てた指導となるようにする。理科では身の回りの生活に関する知識を学習内容と結びつけ、実験・観察において日常生活に基づいた考察ができるようにする。

◆「自分の考えを持ち、対話を通して考えを豊かにできる子どもの育成」を研究主題とし、国語科2年目の研究を進めている。今年度は特に「対話」をカギとして物語文の内容を扱うことによって、考えを豊かにすることに重点を置いている。子どもたちが学習内容に興味をもち、主体的に学びを進め、勉強を楽しむことができるように、国語科の「栄小学びのサイクル」を他教科にも生かして研究を推進していく。

児童質問より

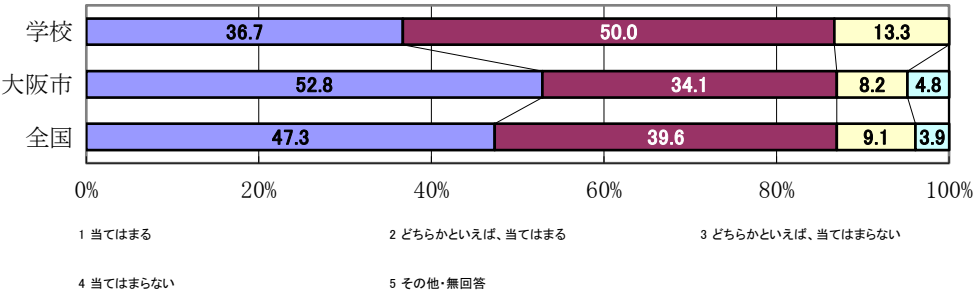
質問番号

質問事項

5

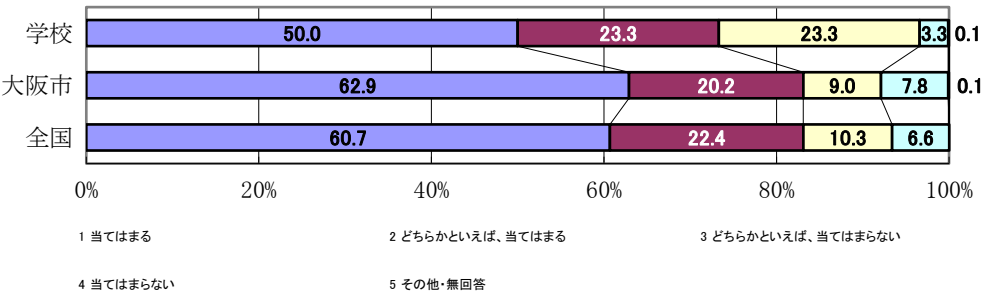
自分には、よいところがあると思いますか

1 2 3 4 5 6 7 8



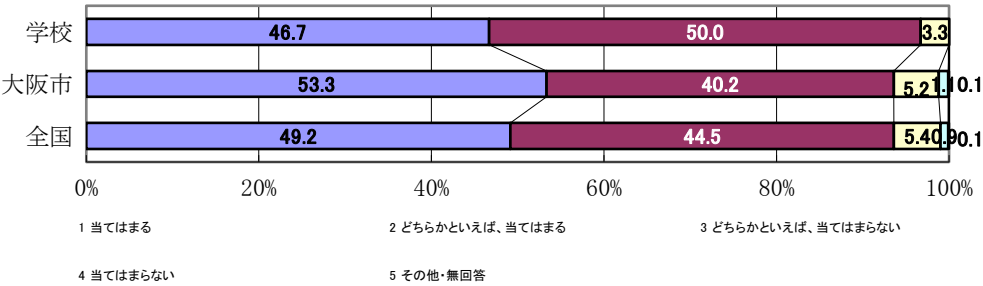
7

将来の夢や目標を持っていますか



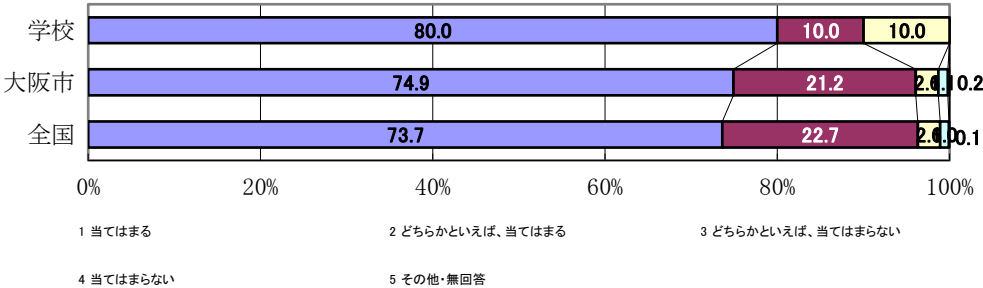
8

人が困っているときは、進んで助けていますか



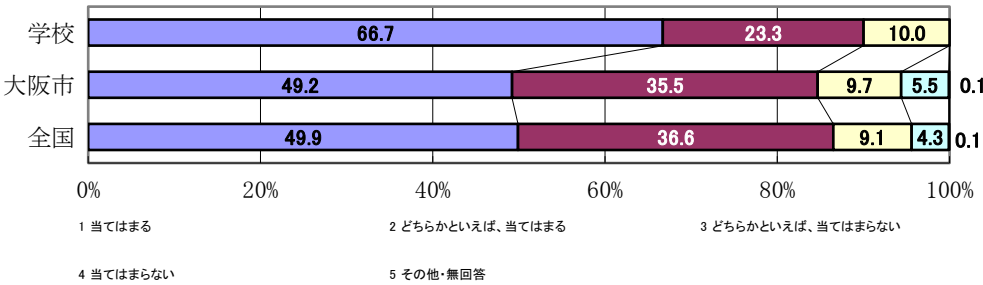
11

人の役に立つ人間になりたいと思いますか



12

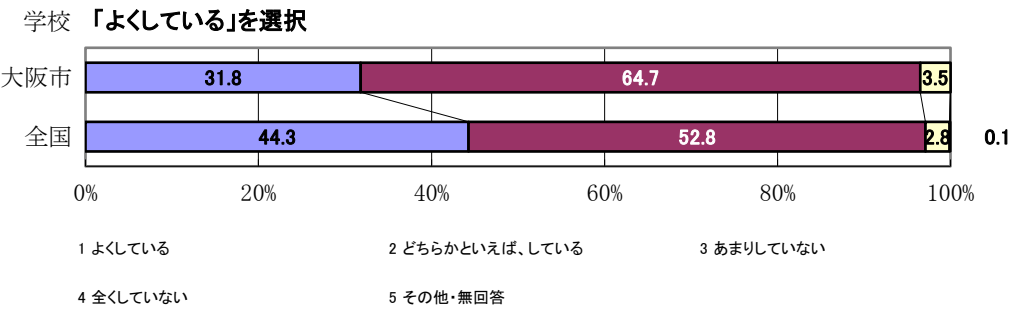
学校に行くのは楽しいと思いますか



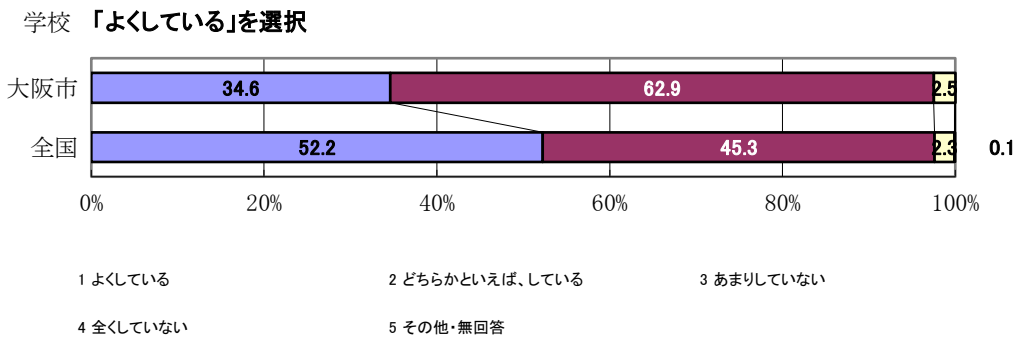
学校質問より

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10

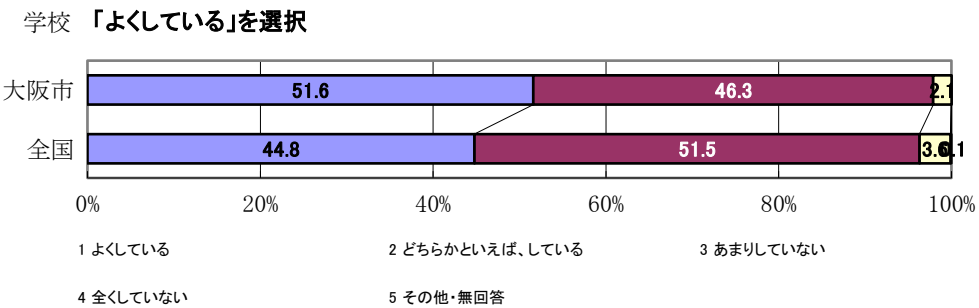
質問番号
質問事項
15
児童の姿や地域の現状等に関する調査や各種データなどに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか



16
指導計画の作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせていますか



17
言語活動について、国語科を要としつつ、各教科等の特質に応じて、学校全体として取り組んでいますか



55
前年度に、教員が大型提示装置等(プロジェクター、電子黒板等)のICT機器を活用した授業を1クラス当たりどの程度行いましたか

